

武庫川臨床教育学会 ニュースレター

2025.6.21 No.29



能登半島地震と子ども・教育・地域小さな学習会（石本日和子会員の報告概要）

昨年の 9 月に能登を訪問された石本さんは現地での聞き取りとリアルな状況を詳細に報告されました。一点目は、能登半島地震とはどういう地震であったかということです。超巨大地震によって地域が孤立したこと、地震前から兆候はあったものの、複合災害となったことで復興が全くできていません。マグニチュード 7.6 の地震は阪神淡路大震災に匹敵するもので、能登半島の地形は変質しました。二点目は、教育面です。石川、新潟、富山の 890 校が被害に遭い、今までの過疎化と重なり急激な統廃合が起こっていること、文科省の支援はあるが、現場のニーズと実態があてないことなどが話されました。地元の金沢大学から支援に入った学生の声も紹介されました。都会にない人間関係があり、子どもたちは思っていたよりも元気で励まされたが、写真をやたらに撮り、メールばかりしている子どもも多く、子どもたちの二面性を理解することが大事だと話されました。意見交流においては、「リアルで非常に実態がよくわかったし考えさせられた」「この未曾有の災害を政治の力で変えられるのか」「何もできてない自分はもうどうしたらいいのか」「武庫川臨床教育学会でできることを考えたい」など感想が語られました。

石本さんは、「自分自身が阪神淡路の災害の記憶はなくなっていない、当事者である自分が能登の人たちの声をしっかり聴く必要を感じている。現地だけでは復興できないし、押し付けでなく共にできることを模索したい、子どもたちを単純に「美化」するのでなく生きる意味を共に考えていきたい」と、むすばれました。石本さんが「負い目」を背負いながらも、それに今なお向き合っておられる生き方に大変感銘を受けました。

武庫川臨床教育学会

<http://mukogawarinkyo.com/>

〒663-8558

兵庫県西宮市池開町 6-46

武庫川女子大学教育研究所内

電話番号:075-922-7749（吉益自宅）

メール: mukogawarinkyo@yahoo.co.jp

小さな学習会の予定 ※参加申し込みは事務局まで→ mukogawarinkyo@yahoo.co.jp

1. 桃山学院教育大学の視察 案内：加藤 恵美子 会員

8月29日（金）10時～12時 桃山学院大学 エノア館ロビー集合
桃山学院大学への行き方（右の二次元コードからも確認できます）

https://www.youtube.com/watch?v=bDTuVc_EJVE



桃山学院教育大学アクセス

2. 社会福祉法人大阪西本願寺 常照園への視察 案内：小西 健太 会員

11月1日（土）10時 現地集合



常照園アクセス

3. 福祉実践の報告 報告：小保方 敬子 会員

10月4日（土）17時開始 オンラインにて

第19回研究大会の感想から（いくつかの感想紹介です）

○会員の問題関心を参加者とともに交流できたことが意味深かった。身近な問題を取り上げ、他者の意見とともに深掘りすることの意味をあらためて確かめることができた。

○報告者の語りに耳を傾けながら、日常的な問題関心（現在進行形）を交流することは、学会としてだけでなく、共同体として必要なことではないかと思った。フロアの参加者が語りあう様子を見ていても、まだ話し足りないグループがあるように思え、日常的な問題関心の交流を学会においても重視することが必要なのではないかと感じた。

○このシンポジウムは定着してきたように思う。グループ討論も限られた時間だが、参加者が主人公になる点でいいと思います。

○ご多忙のなか、現地にお越し下さった庄井先生に心より感謝申し上げます。庄井先生のフィンランド研究の礎から今日的な問題関心まで深く広く話していただき、研究的な刺激を得ることができた。同時に、臨床教育学が個人の研究・実践と不可分であることも感じ、一人の人間が生きるうえで感じ考えること、関心を寄せること、問題とすることを土台として、臨床教育学研究が胚胎するのだということを実感した。遠路はるばる来ていただいたが、それだけの価値があるものであった。やはり対面で話を伺うのはよい。

第20回研究大会を、一人ひとりの会員が主人公となる大会に

第19回研究大会の感想を読みながら、来年開催する第20回研究大会の構想を理事会で考えています。小さな研究会の案内を兼ね、40名程度の会員に大会についての希望・要望をお聞きしました。そのなかには、「大会で色々と言言したい」「臨床教育学を学んだ原点を見つめてみたい」「参加者と多様な交流をしたい」といったご意見が多くありました。こうしたご意見を踏まえて、今後、具体化をはかっていきたいです。

第20回研究大会情報 日時：2026年3月7日（土） 場所：武庫川女子大学教育研究所

皆様のご参加をお待ちしています。引き続き、ご意見がありましたら事務局までお寄せください。お願いします。

【重要】ニュースレターの郵送からメール発送への変更のお願い

郵便料金が改定されたため、ニュースレターの郵送に伴う費用が増えております。ご迷惑をおかけしますが、可能な限り、メールでの発送に切り替えていただきたいと思います。メール発送でよい方は、メールアドレスを事務局にお知らせください。また、郵送を希望される方も、その旨を事務局にお知らせください。この機会にメールアドレスの情報も最新にしたいと思っています。現在58名の方がメール発送を登録されています。

事務局メールアドレス → mukogawarinkyo@yahoo.co.jp

年会費の振込もお願いいたします。3年以上会費滞納の方は除籍対象になりますのでよろしくお願いいたします。

会員の書籍紹介



安井 勝 著『明日の道德教育』

文理閣 1,650 円

理論編と実践編で構成されている。理論編は、日本国憲法の理念に立脚し、科学的認識を育む道德的精神を探究している。独創的である。実践編は、中学校道德教科書から四つの題材を取り上げて（それぞれを）教材分析し、学校現場の授業研究に供している。「あとがき」には、学校教師として授業実践を重ねつつ、時代を生きてきた著者の痛切な執筆動機が記されている。渾身の書である。



**道德とはなにか
子どもにどう教えるか**
学習指導要領の解説な生道德教育をめぐる諸問題の核心に迫り、
道德的養育として大切にしたい「平等」を視座に置いた教育を提言。
大塚誠一・定稿 全1,500円＋税



福井 雅英 著『質の高い教師とは』

新日本出版社 2,640 円

本書は6章で構成されている。国家のための人材としての「質の高い教師」を求める文科省へのアンチテーゼ。子どもと教師がともに成長するためにどうすればいいのか。福井元会長の2007年から発表された論文集です。子ども理解のカンファレンスとは何かという問いに正面から実践的理論的に解明された書である。



シリーズ：私と臨床教育学②⑥

自分の目の前に起こっている現象をひたすら見つめ、考えること

※ タイトルは編集部で付けさせていただきました

早川 りか（武庫川女子大学看護学部）

2024年10月26日、私は武庫川女子大学臨床教育学研究科創設30周年記念シンポジウムにシンポジストとして参加をさせていただきました。研究科より参加のご依頼をいただいたのは5月でしたが、このシンポジウムの打ち合わせや準備にかかわる中で、2024年度は「臨床教育学とは、結局何なんだろう」ということをあらためて考える1年となりました。

私と臨床教育学との出会いを思い起こすと、看護教員として8年目の秋、臨床教育学研究科のリーフレットが勤務校に届き、ふと、「臨床教育学」という文字が目に残ったのが始まりでした。日々、看護教育に携わる中で、学生とのかかわりや授業の方法など、これでいいのかと思うこともあり、大学院で学ぶことで、少しでも解決できればと思ったのがきっかけでした。

大学院生としての5年間の中では、修士～博士課程をとおして上田孝俊先生、博士課程では田中孝彦先生にご指導をいただき、大変お世話になりました。

田中先生、上田先生のご指導のもと、私が出たいいちばん大きな学びは、「一人ひとりの語りに耳を傾けること」ということで、それはすなわち、質的研究との出会いでした。大学院の入学前は、私は研究といえば、アンケート調査など量的データを収集するものだと考えていたのですが、さまざまな文献を検討する中で、エピソード記述やエスノグラフィーなどの質

的研究に出会い、また授業の中でもひとつひとつの事例に丁寧に向き合う大切さを知りました。そして、質的研究に出会ったことによって、科学と何かということについても考えるようになりました。

長い引用になりますが、最初に影響をうけた文献の一節を紹介します。

人間にかかわる事象は、それが起こる地域、時間、状況といった特殊な条件の影響を強く受ける。社会が急速に変化し、その結果、生活世界が多様化することによって、心や社会を扱う研究者の前にはこれまでにないような新しい社会の文脈や視界が現れてきている。

こうした状況においては、これまで研究者たちが当たり前のように用いてきた演繹的方法(既存の理論モデルから研究の設問と仮説を導き出して、それらを実証的データと比較して検討する)は研究対象の多様性に十分対応できなくなっている。

(ウヴェ・フリック(2011)新版 質的研究入門-〈人間の科学〉のための方論 春秋社)

質的研究に関する文献を読み進めながら、私は、医療・看護の世界で、「もし世界でたった一人しかかからない病気があるとすると、それは研究に値するのか。」とか、「ごく少数の人たちに起こる病気や現象についての研究は意味をなさないから切り捨てても良いのか。」などの考えが頭にめぐり、そして、それは否である。「ひとつは全部」、「全部はひとつ」と考えるようになりました。私にとっての臨床教育学とは、結局は、自分の目の前に起こっている現象をひたすら見つめ、考えることであるという結論に達しました。

田中ゼミでは、アーサー・クラインマン『病いの語り』、フランク・W・パトナム『解離—若年期における病理と治療—』、『多重人格性障害—その診断と治療—』、アンリ・エレンベルガー『無意識の発見 力動精神医学発達史』などを読みあい、目の前の病理現象に徹底的に向き合う人々の思いや努力、姿勢について学びました。

武庫川女子大学臨床教育学研究科の創設にかかわられた新堀通也先生は、2011年の日本臨床育学会の創設時に、「私は臨床教育学の対象を教育病理とし、教育病理をさらに教育的病理と病理的教育に分けているが、最も身近にあるのは自分自身であり、また、自分の属する家庭、地域、学校、職場であるからそれらに潜む病的現象の解明と解釈が臨床教育学の特質と考えている。」という言葉に寄せられています。

私は、自分をここまで導いてくださった田中先生、上田先生、そして多くの先人に感謝し、そしてその教えを忘れず、目の前のひとつ、ひとつの出来事に向き合っていければと思っています。

引用文献

アーサー・クラインマン

『病いの語り 慢性の病いをめぐる臨床人類学』(1996) 江口重幸 五木田紳 上野豪志 訳 誠信書房

ウヴェ・フリック

『新版 質的研究入門-〈人間の科学〉のための方論』(2011) 小田博志監訳 春秋社

フランク・W・パトナム

『解離—若年期における病理と治療—』(1997) 中井久夫訳 みすず書房

『多重人格性障害—その診断と治療—』(1989) 安克昌 中井久夫訳 岩崎学術出版社

アンリ・エレンベルガー (木村敏・中井久夫監訳)

『無意識の発見 - 力動精神医学発達史 (上・下)』(1970) 弘文堂

※ 次回は荒木実代さんの予定です。

編集後記

▲小さな研究会(石本報告)は新たな学び、問いが広がりました。今年度の計画が決まりました。次回の参加をお待ちしています。第20回研究大会への希望・ご意見は、遠慮なく事務局まで。〈文責：吉益〉